

池大雅の書画をめぐる文化交渉研究

—中国の「詩書画三絶」と日本における受容

要旨

本研究は、文化交渉学の視点から、日本の文人画の大成者とされる池大雅の書画作品を中心に、従来の大雅研究では、それぞれ別個に研究されてきた「書」と「絵画」を統合し、研究が遅れている書の芸術性および書と絵画の関連性を考察し、その上に日中における「詩書画三絶」に関する諸問題を論じるものである。

池大雅の研究は膨大にあるが、それらのほとんどが絵画を中心になされ、21世紀に入っても、書に関する研究は絵画研究の一割にも満たず、現在はやや停滞している傾向にある。かつて犬養木堂は「大雅出でて、日本の書は崩れた」といい、大雅は、日本書道史における異才であるだけでなく、近代書道史の上でも革新的意味を持つ書家であると考えられた。これまで数少ない書に関する研究の中で、注目に価するのは、松下英麿氏の『池大雅の書』、笠嶋忠幸氏の『池大雅の学書法試考』、鄭麗芸氏の「逸情書論—中国書法の日本的受容」などである。しかしながら、大雅にあっては、書風は千変万化し、同じ時期でも風格が全く異なる作品が制作され、他の多くの書家と比較すれば、書風の展開を把握しにくいいため、以上の先行研究においても、主に概説的な内容となり、作品に基づく文字の造形、運筆および墨使いなどについては、具体的な分析が行われなかった。さらに中国書法の受容、あるいは学書の問題について文献的な記録が残されておらず、字形、用筆などの相似による考察も、推測の域を出ていないと言ってもよい。

書に関する研究が不十分なまま、大雅の制作における「書画一体」に関する研究は、ほぼ絵画を主体とし、書は副次的な対象に過ぎない状況である。そのため、書の芸術性および書と絵画の関連性が見落とされ、研究結果が一面的になる傾向がある。また、職業的な文人画家であった大雅は、生計のために、絵画の制作にあたっては、市場（依頼者）の注文に支配されがちで、あまり評判にならなかった書は、相対的に創作の自由度が高く、書作品から大雅の創作理念や意識をより明白に捉えやすいと考えられる。

ところで、本研究は、池大雅の書画を考察するため、今までの文献資料学、図像学、美術史学などの視点も踏まえながら、文化交渉学の研究方法によって、一国の国境を超えて東アジア全域に視野を広げて、研究対象である池大雅を中心に、日本における中国の書と絵画の受容について追及した上に、大雅によって成し遂げられた革新的な文人画創作に関する諸問題を究明する。

研究は主に次の三点について考察する。まず、大雅の書の研究において、中国からの影響とそれによって生み出された様式に関する考察は、きわめて重要である。ここでは、大雅を取り巻く江戸時代の文字環境、あるいは中国製の法帖に限らず、和刻法帖も含めながら、中国の書法受容の様相を解明し、その上、大雅とその文字環境との親密性をめぐる関係性について解明する。具体的には、仮説の結論を検証するために、作品を取り上げる研究方法を避け、大雅 30 歳から 50 歳頃の時期（1752～1773）に制作された七つの《千字文》（五つは楷書体、二つは草書体）を研究対象とすることで、複雑な書風の展開を簡略化し、大雅の抽象的な学書の過程を一層具体的に考察する。さらに、江戸時代における千字文の普及状況を考察し、学書とされた千字文の書跡資料と大雅におけるその影響を抽出し、中期の書風が複雑に変化した原因を明らかにする。次に、大雅三十歳から五十歳頃の時期（1752～1773）に制作された七つの《千字文》を研究対象とすることで、複雑な書風の展開を簡略化し、大雅の抽象的な学書の過程を一層具体的に考察する。また、江戸時代の前・中期において中国の臨書観念の受容様相を明らかにした上に、池大雅と中井董堂を比較しながら、異なる臨書観念が個人的風格を形成する場合、どのような影響を与えたのかを検討する。

続いて、大雅の扇面画『東山清音帖』を中心に、扇面画における文人画制作を検討し、晩期作品における書・詩・画の関係を究明する。山水という画題から、大雅の扇面画においては、中国の『名公扇譜』の画題と構図を参考にしていることが明らかである。同時に、山水扇面画の構図について、大雅は独創性を十分に示し、山水の配置を扇面の形に従って行っていることと、中国の広大な全景構図とは異なり、トリミングされた部分的景観が描かれ、装飾性と美術性を兼ね備えた絵画形式となっていることを論じる。

さらに、『東山清音帖』における「瀟湘八景」という中国の伝統的な画題の受容を検討した上で、そこに表出された不思議な詩書画の関係を解釈するため、大雅晩期の作品を採り上げ、大雅の文人画に異なる「詩書画三絶」の形式をそれぞれ考察し、そこに表出された大雅の斬新な「詩書画三絶」の観念について検討する。要するに、詩・書・画の関係は、従来的一致、また補い合う関係とは異なり、不即不離という関係であり、大雅が晩年に禅宗の影響を受け、形式主義に対して抵抗して、絵画制作が自由自在となり、近代美術に見られる「遊びの性格」が表明されたと考えられる。この研究の枠組みを通じて、池大雅の文人画をめぐる諸問題を究明した上で、文人画の鑑賞、学習、伝播についての新たな方法を提示することを目指す。